

【編集後記】

なにわ大阪研究センターは、2016年の発足以来、社会連携部に所属していましたが、2024年度から博物館の傘下に移行することになりました。当センターが他の研究機関とは異なり、社会連携部に属していたのは社会連携・社会貢献にその使命があったからにはかなりませんが、これは博物館の使命の一部でもあります。同じ建物のなかで同じ使命を担いながら所属が異なるというのは、ある意味非効率的な面がありました。これを一体化することで、無駄をはぶき、おたがいの長所をさらに充実させようというねらいであります。というわけで、本号は、現行体制での最終号となります。

2015年に調査が行われた「浪花名所図屏風」が、今年度、ご所蔵の門 善孝様より当センターにご寄贈いただきました。調査当時に複製を作成していましたが、やはり現物にふれるとさまざまなことが考えられてきます。現在、再調査の準備をはじめており、調査結果の公開とあわせて、しかるべき時期に公開したいと考えています。ご寄贈いただいた門 善孝様に厚く御礼申し上げます。

本号も関係各位のご努力下、論文2編、研究ノート1編、資料1編を掲載できました。論文2編は現在のセンターの当面の中心課題である「見える化」に関するもので、林副センター長のご尽力によるもの、北川氏の研究ノートは本センターの目的の「なにわ大阪研究」そのものの課題、そして、藪田氏の資料は、現在進行中の堺市との連携事業である、堺鉄炮鍛冶屋敷関係の貴重な資料の紹介です。いずれも本センターならではのもので、各位に御礼申し上げます。口絵として、本学図書館蔵契沖書状を紹介させていただきました。一昨年の新収品ですが、以前本紙で紹介した「歌稿」とともに、4月からの博物館での文学部100周年博物館30周年の記念展示に出展される予定です。

センターの研究報告として、昨年度終了の2件の成果報告2篇と、今年度の研究概要2件があります。基幹研究班は期間が単年度と定められていますが、昨年度まで3年間の総括と次年度以降の展望を兼ねています。次年度以降の新たな展開にご期待ください。

また、橋寺氏には創刊号以来、引き続き表紙絵の選定とその解説をいただきました。裏表紙の大正橋は子どものころ、木津の木材市場に材木を引き取りに行くトラックで渡った記憶があります。アーチ形の橋を渡るときのドキドキ感が妙に心に残っています。今はアーチもなくなって市電もなくなって普通の大きな橋ですが、大阪ドーム（現、京セラドーム大阪）の行き来によく利用しています。大阪の景色も時とともに変わっていく様子が橋寺氏の解説からうかがわれます。われわれも時とともに、つねに、進化した新しい姿でありたいと願いながら、新しい頁へとすすむ所存です。

組織的にはかわりますが、当センターの研究・社会貢献はかわりなく継続します。今まで以上のご協力・ご支援をお願いいたします。

2024年3月

関西大学なにわ大阪研究センター長
乾 善彦